

震災がつなぐ全国ネットワーク
2011年度 第29回定例会議
議事録

□日時：2011年11月27日（日）13:30～16:15

□場所：世田谷ボランティア協会（東京都世田谷区下馬 2-20-14）

□参加者：村井・頼政・法化図（被災地NGO協働センター）、市川（シャンティ国際ボランティア会）、渡辺（ADRA Japan）、外木（国際ボランティア学生協会）、北村（チーム中越）、阿部・鈴木（世田谷ボランティア協会）、岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ）、君嶋（とちぎボランティアネットワーク）、栗田・松田・加藤（レスキューストックヤード）、村野松山（静岡県ボランティア協会）、樋口（日本財団）

代表・栗田より

今回の東日本大震災の支援については、広域だったということもあり、8か月たった今も各団体が現地で活動を行っている。今後は、各団体の動き、対応をどうしていくかの議論もしていきたい。

思い起こせば、3月14日に日本財団・村井・小野田・栗田で話し合いを行い、日本財団から支援に関する全面協力の申し出をいただいた。足湯ボランティアの派遣を開始し、7,000以上のつぶやきをひろっている。その後は仮設支援連絡会も設置し、月に一回の会議の場を設けている。年度末に向けては来年度以降の予算的課題などをひとつずつ整理していく。

【報告】

1. 各地緊急救援の報告（東日本大震災を除く）

(1) 2011年 新燃岳噴火災害

期間：2011年7月

内容：・レスキューストックヤードからスタッフが大規模噴火から約半年の宮崎県高原町を訪問し、大分県社会福祉協議会の研修に、地元社協と地元NPO団体およびボランティアと一緒に参加した他、地域住民数名にヒヤリングを行った。【別紙1】

●補足：被災地NGO協働センター

被災地NGO協働センターでは、新燃岳噴火災害で灰をかぶり売れなくなった野菜を東北の炊き出しで使ってもらう「野菜サポーター」の支援を行い、現在も継続している。集まった寄付金は買い付け料と輸送費に使っている。

(2) 2011年 新潟・福島豪雨水害

期間：2011年8月

内容：・水害ボランティアマニュアルを各ボランティアセンターへ送付した。

●補足：チーム中越

阿賀町のボランティアセンターの支援に入った。

●補足：とちぎボランティアネットワーク

福島県只見町・金山町に日帰りのボランティアを派遣した。

●補足：IVUSA（国際ボランティア学生協会）十日町に30人・3泊でボランティアバスを出した。

(3) 2011年 台風12号水害

期間：2011年9月～10月

内容：・レスキューストックヤードが先遣隊としてスタッフを派遣し、名古屋市社会福祉協議

会と共同で三重県紀宝町へボランティアバスを派遣した。【別紙2】

●補足：被災地NGO協働センター

那智勝浦へ5回程ボランティアバスを派遣した。
※協働センターからの岩手行きのみごころ便を和歌山にした。

●補足：IVUSA

170名の関西の大学生を熊野市に派遣した。きっかけは会員の大学生が被災したことだった。

【課題】

台風12号の支援を通して、人がいない、道が一本しかない、などの課題があがった。東海・東南海・南海が起きたら、ということ想定して対策を考えていかなければならない。

またその直後の台風15号によって名古屋では100万人に避難勧告が発令されたが、その後の調査によるとたった0.6%の人しか避難をしなかった。避難行動は市民に浸透していないことが明らかになった。水害に対する警戒感も今後強化していかないといけない。

2. 東日本大震災支援活動の報告

2011年 東日本大震災

期間：2011年3月～

●ROAD事務局より報告【別紙3】

※コーディネーターへの支払いは3月末までとなる。

※足湯機材は加盟団体で引き受ける→仮設などで使ってもらえるのがベストである。

●仮設支援連絡会について【別紙4】

- ・ROAD事務局が事務局機能を担う。
- ・社会的包摂サポートセンターとの連携が考えられる。
- ・支援の事例集「いいね！事例集」を作る（成

功例・失敗例)

※仮設支援連絡会だけでなくJCNとも連携していきたい。

● 初動対応費の支出状況【別紙5】

- ・2011年度の通常申請分の初動対応費はすでに使い切っている。
- ・2011年度の追加助成については近日中に14,800,000円の振込が予定されている。

● 被災地での炭の利用について

- ・神戸の1998年の新湊川水害からスタートした取り組みで、2009年の兵庫県佐用町でも全国から炭を送っていただいた経緯がある。
- ・東日本大震災では日本財団の沢渡さんのご協力もあり石巻市に炭を運んだ。
- ・陸前高田の大石公民館でも炭の利用を考えている。
- ・大分では、大分県ボランティア・市民活動センターが県内のとりまとめを行い、岩手県花巻市・宮城県仙台市に炭を送る。
- ・今後、被災地での炭の利用にかかる費用をどうするのが課題。

→日本財団より

個別に炭をというよりは、震つなの支援活動をわかりやすく説明し、その一部であるという位置付けを提示することが必要。きちんとした予算と計画を出した上で相談すれば、支援をしていく可能性もある。

● 震つな加盟・各団体の今後について

- ・RSY…人の体制をどうするのが課題。スタッフ1名を残して活動を継続してはどうかと町からも言われている。プレハブをどうするのが決まっていない。ゲートボール場なので、地元を引き渡しをしたいという声もある。撤退ではなく、なんらかの形で続けていく。
- ・被災地NGO協働センター…遠野は静岡県ボ

ランティア協会の方針にあわせながら今後も一緒にやっていく。新しい公共の支援事業で2012年度末までの予算がついている。どういう形で人を送り続けるかは未定。プレハブは継続（2年間）。維持費・コーディネーターの人件費が課題。

・SVA…2年間は今の体制で行う。倉庫は継続。拠点は移す予定。

・ADRA…2013年度まで継続。

・ダイナックス…津賀・橋本両氏が継続して動く。

・神奈川県災害ボランティアネットワーク…県としてもう一年支援を続ける。植山氏がNPO法人化する予定の県の災害ボランティアネットワークの代表となる。

・IVUSA…9月で100人規模の大学生派遣は終了。今は依頼があったら月に1回くらいのペースでバスを出している。今後は模索中。作業内容は泥かきなど。

・チーム中越…陸前高田では陸前たがだ八起プロジェクト（新規震つな会員）がNPO法人化して活動を継続している。郡山市では社協と一緒に継続して活動する。学生ネットワークも構築できているが、学生さんへの交通費が課題。

・世田谷ボランティア協会…専門ボランティア（ヘルパーと看護師）の派遣を行ってきたが10月半ばで終了。（夏からはボラバスを3週間に1度のペースで陸前高田と山元町に派遣）今は電話確認でニーズがあるところに週末の弾丸バスとして派遣している。

・日本ファーストエイドソサエティ…赤ちゃん一時避難プロジェクトを継続して展開。県外に避難させていた赤ちゃん～小学生の子をもつ親を送り届けて終了。結局仮設・地元にもどっても問題は継続してある。調査・こころのケアを小児科医など中心に継続している。福島への支援として2泊くらいでこどもを外に連れ出して遊ばせる、というのを3年くらいは続けたい。

・とちぎボランティアネットワーク…キャンパチのスタッフ3名（うち1名は2年契約）で当面は継続する。山元町に日帰りでバスを出し、週末は3月まで継続する。福島の仮設でまけないぞうの交流会をやっている。県外避難の支援について、当面2年間は続ける。

・村野…大分コープさんと一緒に福島の生産者を応援する交流会を福島で実施した。そのつながりから福島の方を大分にお呼びするプロジェクトを計画している。費用が230万くらいなので、募金を募っている。

・茨城NPOセンターコモンズ…県外避難の支援、復興支援バスツアー（いわき市の沿岸）を行っている。

・アレルギー支援ネットワーク…ROADの車両をつかってアレルギーの物資を大船渡を中心に配布している。

3. 移動寺子屋進捗状況の報告と今後の計画について

(1) 応急対応 in 東京【別紙6】

集まれROAD 足湯隊！～2ヶ月の足湯から見えたもの

日時：2011年5月22日（日）14：00～17：00

場所：日本財団（東京都）

担当：震つなROAD事務局

(2) 被害軽減 in 和歌山【別紙7】

日時：2011年11月23日（水）13：30～16：00

場所：新宮商工会議所 大会議室

担当：わかやまNPOセンター 有井氏

(3) 被害抑止 in 名古屋

日時：2012年1～2月の水曜日の夜の開催

場所：名古屋市内

内容：水俣の教訓から学ぶ

担当：RSY（愛知県被災者支援センターPSチームの勉強会を兼ねる）

※村井氏のつながりから、水俣の支援者である谷洋一さんをお招きして勉強会を行う。

※復旧・復興 in 木沢については木沢の家が倒壊したため、実施は難しい。

4. 日めくりカレンダー制作について

当初、5月に合宿を行ってカレンダー制作を予定していたが、東日本大震災をうけて延期することとなった。その為に予定して分の予算を仮設支援連絡会の費用に充てる。

予算：旅費200,000円・印刷費420,000円 計620,000円（2011年度予算書【別紙8】）

5. 次年度事業計画について

●日本財団2012年度申請書【別紙9】

- ・寺子屋3回・拡大寺子屋1回
- ・総会5月…気仙沼で調整できないか打診
- ・寺子屋9月くらい…和歌山でできないか調整
- ・定例会11月…高知（拡大寺子屋を想定）

※9月の寺子屋に参加した和歌山のメンバーからも参加してもらおう。

※ダイナックス津賀氏・高知出身であり、高知市民会議との付き合いもある。東日本大震災の前から、例年行っている静岡の図上訓練を高知でもできないか相談していた。

問題として感じていることは、文化的に高知にボランティア文化が根付いていない、人柄が明るい人が多い・深く考えない、沿岸部と山の文化が全然違う、などがあげられる。

※11月の後半の土日で調整したい。

●ROAD事務局について

- ・日本財団内の事務局設置は3月までとなる。
- ・報告会は震つな報告会として単独してやる。

※日本財団は4月以降に報告会を設ける。

3月19日が第一希望、日程調整はこれからつめる。

- ・報告書の作成も行う。

●仮設支援連絡会について

・来年度以降の仮設支援連絡会の事務局体制が未定。

- ・財源がないので日本財団とも相談が必要。

6. その他検討事項

●村井氏より

日本財団の担当者へ提案：広域連携を考えた時に、船をもっておくことができないか。

平時は岸壁につけておき、ボランティア・防災研修に使って収入を得ながら運用する。

小さい船を持っている人同士で普段からつながっておいて、ネットワーク化しておくといい。

船は、ヘリと同様、限られた人が限られたものを使って緊急時に活動するためのものとも考えられる。小型船なら燃料の心配は大型船に比べてないが、途中途中で補給できるのか、などの疑問が残る。

新燃岳噴火災害について[第 57 報]灰干しプロジェクト！

2011 年 7 月 14 日 20:40 RSY ブログより

みなさま

RSY 加藤です。

7 月 8 日の夜から 11 日まで新燃岳噴火災害で被害を受けている宮崎県の高原町に行ってきました。10 日には大分県社会福祉協議会の研修のみなさんが高原町 を訪問されました。高原町社協の方のお話や地元の方、県外ボランティアを交えた車座トークなどが行われ、噴火災害の特徴、当時の様子や活動について、高原 町の現状についてなどの話ができました。



6 月 28 日に梅雨明けした後、最近また噴火していると聞いていましたが、夏場は風向きが変わり、えびの市や小林市で降灰が見られています。

高原町はすっかり夏の空気でした。2 月に来た時、マスクなしでは外に出られませんでした。今回は車の窓を開けて走れるほど、空気が澄んでいました。ずっと通行止めだった高原町から鹿児島県霧島市へ通じる道も通れるようになっていて、所々工事中でしたが、雨が降ったこともあり、道中でほとんど灰は見られませんでした。最近では地元の方も、この道を通って高千穂牧場に行ったり、霧島神宮の方に出掛けています。

地元のみなさんはそれぞれ様々な取り組みを始めていました。そんなお話をする時は“わくわく”“イキイキ”した表情でお話してくれました。

その取り組みのひとつが「灰干しプロジェクト」。3 月頃に灰干しの取り組みを大学の先生を通して知ったことをきっかけに、「最初はどんなものかと半信半疑だった」そうですが、徐々に地元の NPO や女性を中心に試作を繰り返し、お肉や魚、野菜の灰干しを広げていこうという動きがでてきました。日曜日には宮崎の女性を対象に講習会も行われていました。鹿や猪肉も柔らかくて食べやすくなる、ということで、実際に私も美味しくいただきました。今回の噴火 災害で鹿が山から下りてきている、という話が以前ありましたが、畑を荒らしたりする問題もあるらしく、その対策にもなっているようです。実際に、今回私もなんと野生の鹿に遭遇しました。

8 月には宮崎県のコンテストにも出展を予定しています！「話題性だけじゃなく、味で勝負するぞ！」と意

【別紙1】

気込んでいました。「いろいろ大変だけど、諦めない。」という言葉がとても印象的でした。灰干しの取り組みは他でもやっているようですが、たまたま高原に降った灰はサラサラと粒子の細かい灰だったので、当時はその細かさで部屋まで入り込んで大変でしたが、今はそのおかげでその灰がこのプロジェクトに使えるとのこと。まさに「ピンチをチャンスに！」と言った笑顔がとっても素敵でした。今後の灰干しプロジェクト、要注目です!!

しかしながら降灰が続いている以上、みなさん「季節がめぐり、風向きが変わればまたこっちにくるよね...」と、まだ終わったわけではない、という気持ちは忘れてはいませんでした。次の避難についての不安を口にする方もいました。梅雨の間には台風が接近したり、避難準備が発令されたりしましたが、河口付近にはそれ以前と変わらないくらい的大量の火山灰が堆積しているため、引き続き土石流の心配が残っています。また有識者によると、桜島でも火山活動が活発化するなど、新燃岳でもいつ大きな噴火があるかわからないとの話です。

★灰干しとは？

火山灰を敷き詰めた上に新聞紙・セロハンを敷き、その上に野菜や肉・魚をのせます。さらにセロハン・新聞紙をのせたものを冷蔵庫で一昼夜ねかせます。そうすることで食材がなぜか柔らかく、クセがなくなります。さらに炭火で焼くと美味しさがアップします。

三宅島でも他地域とのネットワークを利用した灰干しプロジェクトによる地域再生の取り組みを行っています。

続く災害 台風12・15号の猛威

3.11の東日本大震災から半年、2つの大きな台風が続いて日本列島を襲いました。台風12号、15号ともに西日本から北日本にかけての広い範囲に記録的な大雨をもたらし、各地で様々な被害が発生。

RSYとしては台風12号で甚大な被害を受けた紀伊半島に資機材の搬送やボランティアバスでの支援を行い、台風15号で被害を受けた名古屋市守山区では泥出し活動などを行いました。

今号はその被害状況とRSYの動きを紹介します。



はぶらしが細かいところに大活躍!

台風12号 2011/8/30~9/6

25日に発生、28日には強風域の半径が500kmを超え、30日には中心気圧965hPa、最大風速35m/sの大型で強い台風に。加えて動きが遅かったため、西日本から北日本の山沿いを中心に広い範囲で記録的な大雨となった。30日17時からの総降水量は、紀伊半島を中心に広い範囲で1,000mmを超え、奈良県上北山村上北山で総降水量が1,808.5mmとなるなど、総降水量が年間降水量平年値の6割に達したところもあり、紀伊半島の一部の地域では解析雨量*にもとづく総降水量が2,000mmを超えるなど、記録的な大雨となった。このため、北海道から四国にかけての広い範囲で床上・床下浸水などの住家被害、農林水産業への被害、交通障害が発生した。

(9/7 15時現在 消防庁より)

被害概要	全国	三重	奈良	和歌山
死者	73	2	11	50名
行方不明	19	1	13	5名
全壊	179	59	47	68棟
半壊	595	12	10	529棟
床上浸水	8,626	2,182	87	4,081棟
床下浸水	19,197	838	24	3,180棟

(10/05現在 内閣府調べ)

今回の総雨量1,800mm...
3倍!?
ちなみに...
東海豪雨(2000.9.11~12)
総雨量.....566.5mm
1時間雨量.....97.0mm
(名古屋地方気象台より)

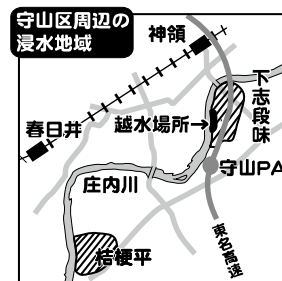
台風15号 2011年/9/15~9/22

13日に発生、20日には中心気圧が940hPa、最大風速が50m/sの非常に強い台風となった。湿った空気が長時間にわたって本州に流れ込んだこと、上陸後も強い勢力を保ちながら北東に進んだことにより、西日本から北日本にかけての広い範囲で暴風や記録的な大雨となった。15日0時から22日24時の総降水量は、宮崎県美郷町で1,128.0mmとなるなど、九州や四国の一部で1,000mmを超え、多くの地点で総降水量が9月の降水量平年値の2倍を超えた。沖縄地方から北海道地方の広い範囲で住家損壊、土砂災害、浸水害等が発生。農業・林業・水産業被害や停電、鉄道の運休、航空機・フェリーの欠航等による交通障害が発生した。

(9/24 13時現在 内閣府より)

被害概要	全国	愛知県
死者	16名	3名
行方不明者	2名	2名
全壊	12棟	3棟
半壊	17棟	8棟
床上浸水	1,537棟	17棟
床下浸水	3,630棟	29棟

(10/05消防庁 09/22愛知県災害対策本部)



RSYの動き▶▶ 9日、東日本大震災支援で活用されたものを含む10tトラック分の資機材を、三重県紀宝町・熊野市(サテライト2ヶ所)、奈良県天川村へ名古屋から搬送しました。12日には、過去3年間紀宝町の災害ボランティア講座の講師を浦野が務めたという縁から、栗田・浦野が三重県紀宝町へ。9/15~10/9の間に、ボランティアバスを名古屋市社会福祉協議会(社協)との共同で出し、ボランティアコーディネーターなごや、名古屋市社協職員のご協力のもと、1~8陣で105名の参加がありました。

作業内容は、個人宅(屋外・屋内)での片づけのお手伝い(流された木材・濡れた家具・畳の回収、床下・床上の泥出し・拭き掃除など)や公民館などの掃除が中心でした。紀宝町の災害ボランティアセンターはボランティア募集を10/16までとじていますが、RSYとしては、泥だし作業だけで終わるのではなく、バザーなどの支援を引き続き考えています。

RSYの動き▶▶ 今回の台風によって、名古屋市では守山区桔梗平(ききょうだいら)と下志段味(しもしだみ)で床下・床上浸水の被害があり、床下の泥出し、床の掃除などの活動が行われました。

23日に資機材を桔梗平に運び、庄内川河川敷に設置されたボランティアセンターを通して、名古屋市社協、守山区社協、なごや防災ボラネット、SeRV中京と活動を開始しました。幸い大きな被害がなかったため、数日で作業は終了しました。活動場所付近は田んぼもあり、比較的新しい家屋が多い場所でした。建物の基礎を高くしている家とそうでない家があり、床上浸水した家はやはり普通の高さでした。近年はバリアフリーの家が多く建てられていますが、場所によってはそれが仇となり、土地の性質を知ることは重要なことだと改めて思いました。また、高気密住宅の弊害でなかなか室内が乾かず、ずっと扇風機を回さねばならなかったり、フローリングが主流なために床下の掃除が困難だったり、最近の住宅ならではの課題もありました。

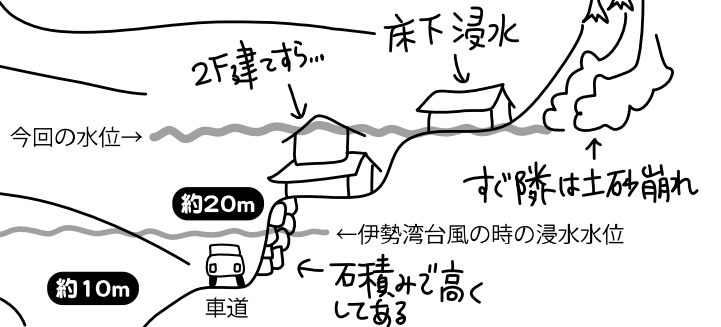
*解析雨量:観測点などが無い地点での1時間の雨量(1km四方)を、全国に設置しているレーダーやアメダスなどの地上の雨量計を組み合わせで算出したもの。30分ごとに作成されるため、9時の解析雨量は8~9時、9時30分の解析雨量は8時30分~9時30分の1時間雨量となる。

紀宝町浅里地区の状況



現地の方のお話

- ・川が湾曲している集落では増水した水が渦を巻いていた。
- ・夜中で真っ暗だった。一時間毎に水位を見ていたが、そろそろ危ないな…という頃に停電になってしまった。防災無線も流され、行政からの連絡もできない状態になり、急いで隣の家に逃げた。
- ・まさか800mの川幅の堤防を超えてくるとは。
- ・防災意識は高く、備えもしていた方だったが…



※和歌山県新宮市相賀の水位観測所で4日、18.77mを観測、伊勢湾台風(1959年)16.40mを大きく超えた(国土交通省近畿地方整備局より)。



今回は、被害が大きく人手の足らない熊野川支流の相野谷(おのだに)川流域の、大里、鮎田地区に支援に入り、その後、浅里(あさり)地区に入りました。

大里、鮎田地区は、熊野川からの逆流を防ぐために閉めていた水門を越え、短時間に浸水しました。浅里地区は川沿いの道路の土砂崩れなどの影響で、ボランティアが入ることができるようになったのは9/27からでした。

もともと紀伊半島は支流が少なく、谷深い地形が海岸部まで続いたため、1か所に水が集まりやすく、そのまま河口部まで影響したとも言われています。浅里地区では明治22(1889)年の大水害※にも浸水しなかった築200年の家が、今回は屋根までの浸水被害を受けました。被害が甚大にも関わらず、メディアであまり取り上げられなかったことなども影響して、今もボランティアは不足気味です。

※明治22年の大水害(十津川大水害)：奈良県十津川村はこの大水害で村民約1万2,800人のうち168人が死亡、約2,400戸のうち600戸2,691人が北海道に移住した。この時、熊野宮大社が平安時代以降初めて被災し、現在の高台に移転をしている。(十津川村史より)

沖縄で台風を考える

毎年のようにいくつもの強い台風が通過する沖縄、宮古島に住んではや5年。いったいどうい台風対策をしているのだろうと、思っていたが、なるほど。最近少し分かって来た。

まず、台風が近づく1、2日前には、台風対策が終了。飛びそうなものは家の中にしまし、雨戸をしっかりとしめ、必要ならビス止めもする。台風が来てから屋根に登るなんて、ありえない。

引越した当初、なぜ物干竿で洗濯物を干す人が少ないのだろうかと思っていたら、そうか、台風で竿が飛ぶからか。それなら紐の方が片付けなくて済む。看板だって飛んで

行くので、コンクリートの壁面に直にペンキで書くのが主流。昔ながらの家はうまく強風を逃がす造りになっていて、家だけじゃなく、集落の木々など、まち全体で台風をやり過ごす仕組みがある。

台風がよく来る沖縄だからやれるんだ、という言い訳はできない最近。見習うヒントがたくさんありそうだ。

そして、何より大事なものは、台風が直撃している時は外に出ないこと。当たり前のようにできていないのは、東京の報道を見たら分かる。あれじゃあ、自ら事故に遭いに行くようなものだ。

災害は甘く見たらイタイ目に遭う。

今回の台風12号で、三重県尾鷲市は4日早朝、河川流域の住民に避難勧告を出したが、それより2日も前に、住民に対し、避難を促す注意情報をEメールや防災無線で提供していた。早めの情報提供が高齢者らの早期の避難行動につながり、結果的に大きな被害は出なかったという。名古屋市も、台風15号の際、河川氾濫などの危険性が高まったとして、一時、100万人に避難指示、勧告を出した。

当然様々な混乱はある。だが、批判するのではなく、早め早めの対応、行動を評価して改善していき、少しでも被害を減らせたと思う今日この頃。(編集委 山田)



<費目一覧>	収入(予算)	支出(予算)	収入高 (11/25現在)	支出高 (11/25現在)	収入高 (3月末見込み)	支出高 (3月末見込み)	備考
会費収入	¥310,000		¥214,000		¥214,000		※1
事業収入	¥500,000		¥61,650		¥61,650		ブックレット売上
寄付収入	¥100,000		¥102,000		¥102,000		
助成金収入 (助成金見込)	¥3,000,000 ¥5,000,000		¥3,000,000		¥17,800,000		日本財団(¥3,000,000)入金済・2011追加(14,800,000)入金予定 日本財団(¥5,000,000)見込(4月時点の見込み)
利息収入	¥1,000		¥0		¥0		
前年度繰越	¥1,187,694		¥6,252,777		¥6,252,777		※2
計	¥10,098,694		¥9,630,427		¥24,430,427		
一般(事業費)		¥905,000		¥105,330		¥504,330	寺子屋・定例会・目録づくり→仮設支援連絡会
一般(管理費)		¥2,010,000		¥523,973		¥1,816,766	総会旅費・事務局人件費・家賃等(名古屋・神戸)
予備費		¥50,000		¥41,220		¥56,680	振込手数料等
初動対応費10追加		¥4,184,272		¥4,241,318		¥4,241,318	※ROADプロジェクト事務局人件費/スタッフ滞在費/コーディネーター活動費
初動対応費11		¥1,000,000		¥1,048,430		¥1,119,998	※新燃岳噴火災害/新潟・福島水害/台風12号/東日本大震災支援活動
初動対応費11追加		¥14,800,000		¥651,120		¥13,592,140	
復興支援支出		¥880,811		¥0		¥0	※中越+岩手・宮城の合算
新燃岳支出		¥469,354		¥0		¥0	※新燃岳寄付金より
次年度繰越		¥664,340		¥0		¥0	
計		¥24,963,777		¥4,911,841		¥21,331,232	

※1 団体正22/個人正13/賛助個人5/自選

※2 一般 ¥1,187,694(新燃岳噴火災害¥469,354・東日本大震災¥263,522を含む)

震災がつなぐ全国ネットワーク
移動寺子屋 応急対応 in 東京
集まれ ROAD 足湯隊！～2か月の足湯から見たもの
 ≪日本財団助成事業≫

日時：2011年5月22日（日）14:00～17:00

場所：日本財団 東京都港区赤坂 1-2-2 2F 会議室

主催：震災がつなぐ全国ネットワーク

協力：ROAD プロジェクト

参加者：ROAD 足湯隊 OB・OG、震つな関係者など 50名

■開会のあいさつ

松田曜子（ROAD プロジェクト事務局・レスキュー
ストックヤード）

これまでの震つなの活動の中でも未だかつてない広範囲にわたる大災害である。ボランティア活動がもたらすものは何か、皆さんと一緒に今後の支援活動を考えたい。

■ROAD 足湯隊活動の概要

松山文紀（ROAD プロジェクト事務局・静岡県ボランティア協会）

思い起こせば3月28日に最初の足湯バスを石巻に送ったところからスタートした。

ROAD プロジェクトは日本財団が行う東日本大震災の支援活動全体を指し、足湯隊の派遣はその中のひとつである。

■メッセージ

「そもそもなぜ足湯だったのか」

村井雅清氏（震災がつなぐ全国ネットワーク
顧問・被災地 NGO 協働センター）

16年前の阪神淡路大震災をきっかけに被災地支援を始めた。当団体では、スタッフが災害発生後すぐに宮城に入って、今は米沢にひとり常駐している。もうひとつは遠野に拠点を置いている。

阪神淡路大震災は1月17日の寒い時期で、東洋医学を学んでいた学生たちが神戸に入り、避難所

でどうにかして身体が暖まる方法を考え足湯を始めた。本来足湯はひとりでやるものだが、対面でやるのは災害救援の現場で生まれたものである。

高野山足湯隊として活動しているお坊さんは、能登半島地震の時にアロマセラピーとあわせて足湯の活動をしている。そこで血圧を測ってみると血圧のバランスもとれていることがわかった。看護学の中では足浴という言い方をしていることから様々な分野でもその効果が認められている。その中でも陰と陽の東洋医学の考え方から取り組んでいるのが我々が行う足湯だ。どうも足湯は奥が深そうだ。不思議なもので確かに効果がある。

私は阪神淡路大震災の前には靴職人を目指していた。足は人を支えているので、リラックスしているときの方が本音で話せて多彩な関係が築ける。

そもそも人間は二足直立歩行で、長時間立つことができるのが特徴である。土踏まずの構造が重たい体重を支えている。水害の後の片づけ作業は足が膨張していて長靴を脱いだり履いたりが大変なので「長靴を履いたまま寝たい」という声がある。だからその後の足湯は本当に気持ちいい。足の構造から考えても納得だ。佐用町でもおじさんたちが足湯をやり始めた。車座でバケツの中に足をつけて、最近は足湯をやりながらお酒を飲んだりもしているそうだ。

しかし足湯で気分が悪くなることもあるから注意が必要だ。骨盤が緩むので寝る前がおすすだ。

最後につぶやきのことを取り上げたい。今後の被災地の復興復旧のためにも内容をしっかり分析して、提言をしていきたい。しっかりつぶやきを分析すると色々なことが見えてくる。

遠野でGW前に報告があったが、未だに「おにぎりが1日2回だけ」ということがわかり、すぐに炊き出しをしてもらった。このようにすぐに対応できることもあれば、中長期的でない解決しないこともある。その上で政策や制度に結びつけなければならない。能登半島の地震では仮設に入っていた人が「仮設をでてもうすぐ離れに住める」とつぶやいた。仮設住宅なら雨がしのげるが、離れは完璧に修復していないから仮設よりももしかして不便かもしれない。それでも離れで自分の家が直っていくことを見届けたいと思っている。ひょっとしたら修復して自分の家に住みたいのではないかということがわかった。当時、間接的に中央防災会議にその声が届き、修繕費に150万円のお金が支払われることになった。つぶやきを分析し提言すると、このように政策が変わる可能性がある。たかがつぶやきだが、生の声には大きなヒントがあり、そこにこだわる必要がある。

一方で深刻なつぶやきに出会うこともある。「生き残ったのは自分だけ」。これは相手に解決して欲しいと思っているのではなく「吐露する」ことでしんどさが軽減されるのである。

湯の力+つぶやき+身体接触で多彩な関係性をつくることのできる足湯だ。不思議なもので普通なら抵抗があるが、30cmの距離で手をさすったりすると、こんなこと聞いていいのか？と思うようなことをつぶやかれる。災害時だけではなく身近なものとしても広がる可能性を感じる。科学的には証明できないが、何か不思議な力がある。ちょっと今までと違った視点から足を眺めてみてください。

■質疑応答

1) 夏場の足湯はどのように行うのか？

2007年の中越沖地震は7月だった。暑いときにもよろこばれた。2009年の佐用では、温泉から出た後に足湯にくる人がいた。理由はわからないけど夏も大丈夫。

2) 失敗談などは？

聴く側にまわるのが足湯だが、あるお坊さんで、普段はしゃべるのがプロという方はどうも話を聴くことができず「学生を参考にして！」とアドバイスしたが、坊さんはずっと話してしまった。失敗ではないがそんなこともある。

3) 高齢者の方はよく足湯にくるが、父母世代の人に来てもらうのに効果的な方法は？

大槌では時間をずらしてやってみた。また、一番効果があるのは子どもに足湯と書いたダンボールもたせて連れてきてもらうことだ。

4) 無口な人に対してはどうしたらいいか？

これは大変難しい。まさにボランティアの真骨頂。ぼつりと出る一言をじっとまつ。本当にしゃべる気力がないこともあるので無理に聞き出す必要はない。

北海道の函館で講演をした時、奥尻の被災者が「なんにもなくなった。家族もなくなって。釣竿と弁当箱しかのこってない。」と言い、ずっと遠くを眺めている。無理にこちらから話しを引き出さなくても、ただじっと寄り添う、実はそれが一番難しいかもしれない。

5) 被災した体験言ったせいで更に落ち込んで、重たい空気になったがこれはどうすればいいのか？

仕方ないことだと思う。我々は専門家じゃない。多くの方は楽になってからまた落ち込む、それでリズムをつくっていく。

6) お水が貴重な被災地で「お水がもったいない」というつぶやきを聴いた。どう返していいかわか

らなかったが？

今までの被災地でお水がもったいないと言われたことなかった。でもそういうつぶやきがあったなら、使い道を考えないといけない。阪神の時は、最後はトイレに使った。そこにいるみんなで考えないといけない。

(石巻に足湯隊として入った方より) 石巻でも避難所で仮設トイレと自衛隊の長靴洗いに水をまわした。



■車座ミニトーク

○宮城県石巻市・山田裕司さん

石巻には3月28日時点で25,000人が避難していた。足湯ボランティアは、まずは泥かきからスタートしたが、その後は整体師と一緒に回ることもあった。

石巻はボランティアの数が多いいのがおどろきだった。自分も初めてのボランティア活動への参加だった。ボランティアの受け入れ態勢も早くでいた。支援者として200団体はいっている。行政単位も大きく、避難所も多い、すなわち多様な立場に置かれた人が多いといえる。

○福島県郡山市・和泉聡子さん

郡山と他の避難所との違いは、ほぼ全員が原発避難者であることだ。富岡町(避難指示地区)と川内村(避難準備地区)がほとんどだ。足湯隊として石巻にもいったので、地震・津波被害との違いを感じた。郡山のビッグパレットは大きな避難所

で1,500人以上が避難している。もうすぐ帰れる人、もう何十年も帰れない人が混在している。東電の社員が家族にいる人もいて、複雑な気持ちでいる。感情が複雑にからみあっている。

日中片づけに家に帰ることもできずやることがないのも特徴だ。不公平感、不条理感を感じている人が多い。原発によってさらに深刻な状況になるかもしれない。

つぶやきはその場で行政に伝えた。第1クールで聴いたつぶやきから「やることがない」という農業従事者が多いということがわかった。そこでビッグパレットのまわりの草木が気になるという話になり、有志で雑草とりのボランティアを募集した。200名集まり、たくさんの方が土いじりをした。1時間も経たないうちに作業は終わってしまった。もっと雑草はえればいいのに！と思わず思ってしまった。

○宮城県七ヶ浜町・清水怜奈さん

<この日のために地元・七ヶ浜から東京にお越しくださいました。>

私の住んでいる七ヶ浜では津波が来たことで友人の家も流された。3月の下旬からレスキューストックヤードが支援に入っており、私は足湯の活動に参加している。「眠れないから薬を飲んでいる」「自衛隊のお風呂には手すりもなく、湯船が深くてこわい」という声が印象に残っている。「津波で流されても七ヶ浜に残りたい」という人が多い。「浜にゴミが多いから海が怒ったんだよ」と言った漁師もいた。

感想として、当初ボランティア活動とは力仕事だと思っていたので、足湯で会話ができるのか、癒してあげられるのか不安だった。

県外から多くの方が応援にきてくれて嬉しい。プレハブ・ボランティアきずな館ではボランティアが入れ替わりで寝泊りしている。毎回20名も来て「何もできなくてごめんね」と言ってくれるけど、ここに来てくれるだけで私たちは嬉しい。

足湯をやる新しいボランティアが来ると何度も同じ津波の話をする人がたくさんいる。それだけ津波がこわかったのだと思う。「元気じゃないとやっていけないんだ」という声をたくさん聴く。足湯だけで出会いの場がつかれるので、顔見知りのおじいちゃんおばあちゃんの中で、ひとりでも来てくれる人がいる限り、私は足湯を続けたい。

○宮城県気仙沼市

避難所の方はボランティアに対してとても明るく接してくれた。「東北の人は強いでしょ？」とよく言われた。被災の度合い（全壊・半壊など）によつての感情の違いもある。「みんなでいる時は笑っているけど、本当は辛い」という声もあった。「避難訓練もずっとやってきたのに」「夜はひとりで運転できない」などの声を聴いた。

ニーズは刻々と変わり、過去の経験は大切だけれど、その時々判断が大切だと思う。また何度も通うことでより現地とのつながりも深くなる。

■グループワーク

4つのテーマに分かれてそれぞれの班でそのテーマに沿ったつぶやきを拾って分析してもらう。

○ユーモアについて

避難所生活では大変な想いをされているが、そんな中でも楽しい話も聴くことがあった。しかし耐えられないものに耐えているんだ、というつぶやきもあるので、もっと分析すると何かみえてくるかもしれない。

- ・生まれ変わったら足湯隊になりたい。
- ・ボランティアさんまたくるって？（ウインク）
- ・足を拭いてもらうなんて女王様になったみたい

○健康について

運動不足や栄養不足が多いと感じた。

- ・散歩したいけど余震でできない。
- ・バランスよく食べられないのでやせた。

○仕事について

水産関係の従事者が多いので、「どうしたらいいんだ」というネガティブな声が多かった。

- ・もうだめだ。
- ・ハローワークも人がいっぱいだ。

やっぱり漁師さんは頑固だ。なかなか足湯にきてくれないので、なんとかいい方法をみつけない。

○生活環境について

お風呂・住居・仮設にはいたい・寝られないという声が多かった。キーワードは、交通・食事・洗濯・人間関係じゃないかと思う。

■コメント

菅磨志保さん（震つな会員・関西大学教員）

私は能登半島地震のとき初めて足湯をして、印象的だったのは80代の方の大きくて分厚い手が仕事をされてきたことを語っていたことだ。足湯は本当に不思議で。応援にきたはずの自分が勇気づけられた。

ただそばにいて一緒にいるよ、ということはボランティア活動にしかできない。継続して交流する、同じ場所に通うなど、たくさんの方が来るだけでなく、交流できる動きが次は必要だと感じる。息の長い活動になると思うので具体的な問題を共有して次につなげるようネットワークをつかって活動してほしいと思う。



（記録／震つな事務局・加藤祐子）

震災がつなぐ全国ネットワーク・移動寺子屋

減災サイクル-被害軽減 in 和歌山

<<日本財団助成金事業>>

報告メモ

日時：2011年11月23日（水・祝）13:30～16:00

場所：新宮市商工会議所 大会議室

主催：震災がつなぐ全国ネットワーク

企画・運営協力：わかやま NPO センター

●基調講演 村井雅清（震災がつなぐ全国ネットワーク顧問・被災地 NGO 協働センター代表）「紀伊半島大水害からまもなく3か月 次の災害に備えて～全国と地域をつなぎ、つむぐために～」



震つなの始まりは1995年の阪神・淡路大震災（以下：阪神）である。被災地のがれきを積んで「神戸を忘れない」というメッセージとともに1年半ほど全国を回った。その時に全国の仲間とのつながりができ、そのネットワークから生まれた。これまでの活動の中で災害時におけるモノ・ボランティア・金・法律などのテーマで被災地からの学びを次に生かすことを目的としてブックレットも発行した。災害ボランティア文化というブックレットは阪神から15年の年に出版し、15年でボランティアが災害時に動くという文化が生まれたことを紹介した。

今回の台風12号水害で新宮は、大阪方面からも、名古屋方面からも、最も遠い位置にあり、取り残されるかたちとなったと聞いている。そこで、新

宮市災害ボランティアセンター（以下：ボラセン）が「新宮に1万人の力を！」と具体的な数字でもってボランティアの募集を行った。これは全国でも初の取り組みだった。ぜひ今後に生かして行ってほしい。

実は、今日一緒に来ている震つな事務局長で、とちぎボランティアネットワークの矢野さんは栃木から神戸にバスをだした。今では当たり前となったボランティアバスの元祖だった。東日本大震災では旅行会社が観光+ボランティアというものを打ち出した。賛否両論あるが、観光で被災地に経済効果をもたらすというのも重要な役割である。ボランティアはいろんなかたちがあっというし、またその土地に行きたいと思う・帰ってくるという仕掛け作りも重要である。

被災地の復興という点において、2009年に兵庫県佐用町で起きた水害では、普段から山が守られていないことが原因として、現在は市民に呼びかけて地元の人と一緒に山の手入れをしている。山と川と海はつながっていて、都市と山の人と一緒に考えるのが重要である。今回の台風12号でも同じことが言えるかもしれない。また日本全国で高齢化が進んでいる。復興へのステージでそれを食い止めることができるかどうか重要なカギだ。

災害救援は「行政がやること」と思うのではなく、市民が積極的に・主体的に参画する、自分たちが変えていく・提案をしていくという必要性を感じる。現場で被災者と専門家などの外部支援者

と一緒に議論をしていくべきだ。東日本大震災以降、国の制度も変わり始めているし、民間もさまざまな動きをしている。これまで日本では農林水産業への支援はあったが、事業主への支援は皆無だった。それでは地域は再生できない。そこで民間の動きとして、ファンド設立など行われている。緊急時・復興期にこのような動きをするためには、日頃から色々な人とつながっておかなければならない。全国と地域をつなぐ、それを今から模索しておくことが必要といえる。

またこの地域は東海・東南海・南海地震の3連動がくると言われている。もしかすると5連動かもしれない。今回の台風の対応が津波被害にも活かされるのかは検証が必要だ。この地域は海に沿って住居があるので、全滅する可能性もある。県内での助け合いだけでなく広域的な支援も考えないといけない。その点からもネットワークを築いておく必要性を感じる。

●有井安仁氏（わかやま NPO センター 副理事長）

今回の震つな寺子屋開催に際しての大きな目的は、全国ネットワークと地元新宮で動く団体を平時からつなぐということである。

●奥西誠人氏（新宮市社会福祉協議会 事務局長）

今回の台風 12 号水害では福祉センターにボラセンを、熊野川にサテライトを設置した。2つの拠点を運営できたのは関係者の協力があってこそだった。新宮市では、5年前から災害ボラセンの設置訓練を行ってきた。大災害に備えて一般市民の参加型訓練である。今回のボラセン立ち上げもこの訓練が活きた、まさに“市民の力”だった。9月6日10時、静かにセンターが立ち上がり、市内を広報しながら歩いた。当日から中高生がたくさん集まり（学校休校だったため）一緒に活動した。

大変だったのは熊野川地域で、道が不通となり、三重を通過して往復3時間もかかった。新宮を經由しないでボランティアが活動できるようにサテラ

イトを設置した。立ち上げには近畿ブロックの社協職員も入ってくれることになった。わかやま NPO センター、和歌山県社協、ピースボートも応援に入ってくれた。

全体で1,000件のニーズ、1,500件の活動（1ケースについて1.5回）10,000人のボランティアの力でなんとか2か月間を乗り切ることができた。いよいよこれから地域の人と一緒にまちづくりをしていく時期になった。

●榎本義清氏（和歌山災害救助犬協会 理事長）

普段は災害救助犬の育成、救助活動を行っている。中越でも6時間後、東日本でも当日には現地に入った。台風12号では、述べ12日間活動を行った。新宮市内はかなり大きな被害がでていて、熊野川の大橋が水に浸かった。国道も膝までつかって線路も消えていた。まるで津波に流されたように家の基礎だけ残してすべて流された事例もあった。犬と一緒に広範囲を検索する中で、かなり離れたところで見つかったこともあった。しばらく現場の様子が「わからない」状況が続いた。本来は生きている人を救うためにやっている活動だが、今回は生存者がいないということを確認する活動になった。大変広い範囲で人間が入れない箇所には犬を連れて行き捜索した。

やはり普段から顔の見えるつながりがないと初動の動きにもぶくなる。東海・東南海・南海、しかも5連動ときは頭が痛い。ひとつの災害を忘れずに、次に備えないといけないと感じる。どのように対処していくのか、どのように命をまもるのか、みなさんと一緒に考えていきたい。

●矢野正広（震災がつなぐ全国ネットワーク 事務局長・とちぎボランティアネットワーク）

普段からのつながり、社協の地域福祉、地元に着したやり方、それをどう災害の時に生かすのかである。お互いに思い合うということも重要だ。普段から、個人のSOSの解決をやっている団体で、

災害の専門ではない。助け合いのつながりが災害救援にもつながっていく。

栃木では、東日本大震災の支援活動として「2万人のボランティアをおくろう」キャンペーンを行った。新宮の1万人キャンペーン、これまで10年もボラセンを見てきたけれど、こんな取り組みは初めて見た。「〇人必要」と具体的に言ったところは少なくともない。栃木で過去に起きた水害で初めてボラセンを開設した。5,500人が2か月間で活動した。割ると一軒の家で11人が活動したことになる。水害作業に必要なボランティアの数はこのように推測ができる。東日本大震災の半壊・一部損壊で計算すると184万人が必要だとわかった。栃木の人口は200万人なのでせめてその1%が行ければいいと思い2万人とした。災害時、ひとつは地元の普段からの力、もうひとつはよそ者の力、それらをどうやって使うのが重要だ。

■新宮型ボラセンの良かった点

村井：1万人のメッセージ。外からのボランティアを受け入れなければ、復興の長いプロセスの中にボランティアが定着しない。

矢野：昔の助け合いは地域の助け合いで、人が外から入ってこない。阪神以降は、助け合いのグローバル化だと思っている。そこには問題・成果の両側面がある。問題は知らない人が来るから疑わしいということで、成果は知らない人たちが助けに来てくれてどんどん進むということだ。問題を解消し、成果を伸ばすために、ボラセンが必要なのである。混乱するのがいやだから、ボラセンを設置する、という考えではなく、よそ者の力をもらって地域でボラセンをつくるという考えが必要だ。

■受援力の難しさは？

村井：日本は地方にいと閉鎖的なところもある。他人が問題を起こす、といった声もあるが、災害時は「お互い様」である。実際は「ボランティア

のおかげで助かった。」と聞くのに、一部マスコミが強調して「ボランティアが問題を起こした。」とか書いたりするとそれが大きく報道される。しかしこれも乗り越えていく必要がある。静岡では東海地震を想定した図上訓練を6年前からやっている。この訓練では静岡県内の人が外の力をどう活かすのかを訓練を通して考えている。

受援力は難しくない。隣の地域にボランティアがきているのに自分の地域にいなかったら、「うちにもきて！」と言う。ただそれだけのことだ。

■新宮のボラセンを振り返っての課題は？

奥西：ボランティアに来てもらうことは難しい、と感じた。1か月もすると落ち着いてしまって市内からのボランティアが減ってしまった、ということもあった。センター立ち上げに際し、資材の調達などまったくわかっていなかった。訓練はしていたけど、実際にどうしたらいいのかわからないこともいくつかあった。

榎本：社協の職員がいなくて困るという声もあったがボランティアでまわすというスタイルをつくり、それを事務局が支えた。よそ者につめたい田舎というのは確かにあるが、被災者はみんな「遠い所からありがとう」と言っていた。団体のボランティアには力があるのでそれをもっと利用できたらいいと思う。

村井：阪神では「来るな」と言われても行ったくらいだが、東日本では「県外は受け入れない」と言った市町村には、全然ボランティアが入っていない。ボランティアはボラセンを通していく、というのが定着したが、阪神ではボラセンがなかったので、ボランティアは自分で考えるしかなかった。今回、釜石の奇跡と呼ばれている釜石東中学で3,000人が逃げて助かったという事実があるが、これも普段から、想定内を信じるな・自分で判断せよ、ということを教えられていた。ボラセンのような調整機能が必ずしも有効ではない。論理的な説明はできないけど、事実としてそうなのだ。

矢野：ボランティアは個別対応ができる。ボランティアのいいところは縁による支援であるが、ボラセンは効率的にできるか、ということが重要視されて、ボランティアと被災者が個別な関わりを持ちにくい。つまり粘着性がない、一回きりの付き合いに終わりがちなので、個人の気持ちがついていかない。特に復興期はその気持ちが重要で、例えば、まけないぞうの取り組みは、タオルを送る人、作る人、買う人がつながっていく。

■資材・ストックヤードについて

村井：名古屋のレスキューストックヤードはプロの運送屋よりも早く資機材を被災地に送っている。静岡県小山町では地域のホームセンターと協定を結んでいる。物やお金も大事だが、知恵が重要だ。

榎本：この地域にストックヤードを設置する難点は道が崩れたらどこにも入っていけないということだ。知恵を出し合っていないかと。

■最後に

矢野：ボラセンという言葉にこだわらないで人助けができる仕組みができればいい。一人では難しいのでチームで継続的にできるようにするといい。ニーズは“ニーズ”と言うしかないが、ここには観察している人の視点が含まれている。本当は違うかもしれない、と考える必要がある。

村井：広域連携とは言っても被災する地域も広域だから、ストックヤードもそうだけど、物資が入ってくるルートをどうするのか、それを自分たちで考えないといけない。新しい社会、新しい田舎を考えないといけない。

榎本：今回新宮に来たボランティアに「災害がなければきれいなところ」と紹介してきた。いろんな人にきてもらって、いざという時に「新宮が今大変だ」と思って助けにまた来てくれるような仕組みがほしい。紀伊半島サミットができるといい。行政も含め、ブラインド訓練（あらかじめ訓練内容を明かさなで行う）などやるといい。想定外

に対応できるようにしたい。

奥西：災害ボラセンそのものを今後どのように発展させたいのかわからない部分も大きい。今後も社協としては市民と一緒にやっていくことをお願いしたい。

村井：ボラセンにあがってこないニーズをどうするのかというところで、我々は足湯ボランティアというのをやっている。被災者が自然に語る「つぶやき」にはいろいろある。和歌山大学の学生さんも神戸大学とのつながりができたので、こういった取り組みを行うのもひとつだ。復興支援センターとなったとき、過去の被災地、例えば兵庫県佐用町から事例を、といえは必ず来てくれるはず。

■新宮へのエール

矢野：10,000人の応援団がいる。直筆の手紙を書くことで喜んでまた来るはず。ぜひ早いうちに。

榎本：これからはいよいよ復興。住民パワーで行政をおしていく、みなさんと一緒に頑張りたい。

奥西：みなさんに感謝する次第です。たいへんな地区もまだあります。ご協力ください。

村井：過去の事例にいろんな知恵がたまっている。復興バネ・災害バネで一緒に頑張ろう。

有井：これから始まり。この寺子屋で“えん”ができた。



(記録／震つな事務局 加藤祐子)

震災がつなぐ全国ネットワーク
2011年度予算
(2011年4月1日～2012年3月31日)

1. 一般会計

【収入の部】

＜費目一覧＞	予算額	(内訳)	備 考
会費収入	¥310,000		(正会員・団体:22、正会員・個人:13、賛助会員・個人:5)
事業収入	¥500,000		
ブックレット売上		¥500,000	ブックレット売上
寄付収入	¥100,000		
助成金収入	¥3,000,000		
助成金見込	¥5,000,000		
利息収入	¥1,000		
前年度繰越	¥1,187,694		寄付収入(新燃岳噴火災害:¥469,354 東日本大震災:¥263,522)含む
計	¥10,098,694		

【支出の部】

＜費目一覧＞	予算額	(内訳)	備 考
一般(事業費)	¥905,000		
移動寺子屋:謝金		¥90,000	講師謝礼 @30,000×3回
移動寺子屋:旅費		¥180,000	交通宿泊費 @30,000×2人×3回
移動寺子屋:会場費		¥9,000	会場費 @3,000×3回
定例会議・役員会議の開催		¥6,000	定例会役員会議会場費 @3,000×2回
日めくり制作:旅費		¥200,000	交通費 @20,000×10名×1回
日めくり制作:印刷費		¥420,000	
初動対応費へ	¥1,000,000 (A)		→2. 特別会計:災害時初動対応費へ
	¥5,000,000 (B)		→2. 特別会計:災害時初動対応費へ
一般(管理費)	¥2,010,000		
コーディネーター活動費		¥1,440,000	事務局人件費(名古屋¥100,000×12,神戸¥20,000×12)
ネットワーク活動推進費		¥50,000	兵庫県震災復興研究センター、広がれボランティアの輪連絡会
定例会・役員会議交通費		¥240,000	定例会役員会議交通費 @30,000×2回×4名
通信費		¥30,000	郵送費
事務用品・消耗品費など		¥10,000	総会案内用ハガキ等
家賃按分		¥240,000	事務局家賃(名古屋¥10,000×12 神戸¥10,000×12)
予備費	¥50,000		振込手数料等
新燃岳支出	¥469,354 (C)		→5. 新燃岳被災地復興支援プロジェクトへ
次年度繰越	¥664,340		
計	¥10,098,694		

2. 特別会計:災害時初動対応費

【収入の部】

＜費目一覧＞	予算額	(内訳)	備 考
前年度繰越	¥4,184,272		
一般会計より	¥1,000,000 (A)		日本財団からの助成金の一部
	¥5,000,000 (B)		日本財団の追加助成金(見込)
計	¥10,184,272		

【支出の部】

＜費目一覧＞	予算額	(内訳)	備 考
コーディネーター活動費	¥4,800,000		ROADプロジェクト事務局人件費(300,000×6カ月、300,000×6カ月、220,000×6カ月)
	¥3,600,000		ROADプロジェクト事務局スタッフ滞在費(200,000×3名×6カ月)
初動対応活動費	¥1,784,272		コーディネーター派遣旅費等
次年度繰越	¥0		
計	¥10,184,272		

3. 特別会計:復興支援プロジェクト

【収入の部】

＜費目一覧＞	予算額 (内訳)	備 考
前年度繰越	¥731,395	中越・中越沖復興支援プロジェクトより
前年度繰越	¥149,416	岩手宮城内陸地震被災地復興支援プロジェクトより
寄付収入	¥0	
利息収入	¥0	
計	¥880,811	

【支出の部】

＜費目一覧＞	予算額 (内訳)	備 考
プロジェクト活動費	¥880,811	
次年度繰越	¥0	
計	¥880,811	

5. 特別会計:新燃岳噴火災害被災地支援プロジェクト

【収入の部】

＜費目一覧＞	予算額 (内訳)	備 考
一般会計より	¥469,354 (C)	
計	¥469,354	

【支出の部】

＜費目一覧＞	予算額 (内訳)	備 考
プロジェクト活動費	¥469,354	
次年度繰越	¥0	
計	¥469,354	

収 支 予 算		(単位:円)	
収入	費目	金額	備考
	助成金(申請額)	3,000,000	
	自己負担額	664,340	664,340(2011年度予算案の次年度繰り越し)
	合 計	3,664,340	←自動で計算されます

支出	費目	¥	積算根拠
	諸謝金 (移動寺子屋)	90,000	30,000×1名×3回
	旅費・交通費 (移動寺子屋)	180,000	30,000×2名×3回
	旅費・交通費 (定例会・役員会議)	240,000	30,000×4名×2回
	災害時初動対応費	1,000,000	
	会議費 (移動寺子屋)	9,000	3,000×3回
	会議費 (定例会・役員会議)	6,000	3,000×2回
	諸謝金 (広域連携拡大寺子屋)	120,000	30,000×4名
	旅費・交通費 (広域連携拡大寺子屋)	450,000	30,000×15名
	その他 (コーディネーター活動費)	1,440,000	120,000×12ヶ月
	その他 (予備費)	129,340	
	合 計	3,664,340	←自動で計算されます

※費目は各団体の会計規則等にあわせてご記入ください

事業スケジュール					
No.	年／月	日	場所	内容	備考
1	2012年5月		未定	減災サイクルの中から、緊急性の高さ、地域からの招致等を考慮しつつ、3つのカテゴリーを選んで開催する。	詳細は、2011年11月27日の役員定例会にて決定。
2	2012年11月		未定	減災サイクルの中から、緊急性の高さ、地域からの招致等を考慮しつつ、3つのカテゴリーを選んで開催する。	詳細は、2011年11月27日の役員定例会にて決定。
3	2013年1月		未定	減災サイクルの中から、緊急性の高さ、地域からの招致等を考慮しつつ、3つのカテゴリーを選んで開催する。	詳細は、2011年11月27日の役員定例会にて決定。
4	2012年11月		高知県等東海・東南海・南海地震の被害が予想される地域	ボランティアの広域連携を踏まえ、三連動地震を視野に入れた「拡大寺子屋」の実施	詳細は、2011年11月27日の役員定例会にて決定。
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					

●2012 年度 助成金申請内容

申請情報

01 申請番号 2513
 02 ユーザ ID info@rsy-nagoya.com 03 申請状況 一時保存

CANPAN団体情報

04 CANPAN 団体 ID [00000737](#) 05 法人の種類 任意団体
 06 団体名 震災がつなぐ全国ネットワーク 07 団体名ふりがな しんさいがつなぐぜんこくねっとわーく
 08 郵便番号 461-0001 09 都道府県 愛知県
 10 郡市区町村 名古屋市東区 11 郡市区町村ふりがな なごやしひがしく
 12 詳細住所 泉 1-13-34 名建協 2 階 レスキューストックヤード内 13 詳細住所ふりがな いずみ めいけんきょう れすきゅーすとつくやーど
 14 電話番号 052-253-7550 15 連絡先区分 事務所・勤務先
 16 連絡可能時間 10 時 00 分～18 時 00 分 17 連絡可能曜日 月 火 水 木 金
 18 備考
 19 FAX 番号 052-253-7552 20 連絡先区分 事務所・勤務先
 21 連絡可能時間 00 時 00 分～23 時 59 分 22 連絡可能曜日 月 火 水 木 金 土 日
 23 備考
 24 URL リンク名 団体ホームページ
 26 メールアドレス info@rsy-nagoya.com
 27 代表者氏名 栗田 暢之 28 代表者ふりがな くりた のぶゆき
 29 代表者役職 震災がつなぐ全国ネットワーク 代表 30 代表者兼職 特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事
 31 設立年月日 1997 年 11 月 9 日

32 設立以来の主な活動実績

1996.11 災害ボランティアの情報交換や支援活動のあり方を検討するために準備会を開催
 1997.11 「震災がつなぐ全国ネットワーク」として全国 9 団体で発足
 1998. 1 KOBE の検証シリーズ小冊子「物資が来たぞう!!考えたぞう!!」発刊
 1998. 8 福島・栃木集中豪雨(8 月)、高知・神戸新湊川水害(9 月)で救援活動を実施
 1999. 1 KOBE の検証シリーズ小冊子「ボランティアが来たぞう!! 考えたぞう!!」発刊
 1999. 7 KOBE の検証シリーズ小冊子別冊「水害発生! どうつくる!? 水害ボランティアセンター」発刊
 1999 広島呉水害・神戸新湊川水害(6 月)、岩手軽米水害(11 月)で救援活動を実施
 2000. 1 KOBE の検証シリーズ小冊子「お金がいるぞう!! 考えたぞう!!」発刊
 2000 有珠山噴火災害(3 月)、東海豪雨(9 月)、鳥取県西部地震(10 月)で救援活動を実施
 2001 芸予地震(3 月)、高知西南豪雨(9 月)で救援活動を実施
 2002. 3 KOBE の検証シリーズ小冊子「情報があるぞう!!考えたぞう!!」発刊
 2003 宮城県北部連続地震(7 月)で救援活動を実施
 2004 新潟・福井水害(7 月)、高松高潮水害(8 月)、三重水害(9 月)、台風 23 号水害、新潟中越地震(10 月)で救援活動を実施
 2005. 9 台風 14 号水害で救援活動を実施

2006. 7 平成 18 年 7 月豪雨にて、救援活動を実施

2007 能登半島地震(3 月)、中越沖地震(7 月)にて救援活動を実施

2008 岩手・宮城内陸地震(6 月)、平成 20 年 8 月末

※CANPAN の登録情報から自動入力される→文字制限あり、ここまでしか入らない

33 団体の目的、団体の活動・業務

・国内での災害時において、このネットワークが活かされた支援活動を行います。

・海外での災害時において、このネットワークが活かされた支援活動を行います。

・阪神・淡路大震災被災地への支援活動を継続するために、このネットワークを活用します。

阪神・淡路大震災を機にいよいよ気付かされた共生型社会の大切さを実践に移す作業として、全国に点在する様々な人々の、様々な違いを認め合いながら、過去の災害が教えた今日の課題を共に学び、共に提言し、あるいは今後の緊急時には共に協働することを基本にします。しかしその関わり具合は各個人や団体により全く自由に選択できる緩やかなネットワークとします。一方、良いことは大いに褒め合い、悪いことは十分に反省し合う素直な関係を築き合いながら、私たちが人としてこれからも「災害支援」の在り方に対して真摯に向き合う仲間の拡大への試みを始めるものとします。

※CANPAN の登録情報から自動入力される

追加団体情報

34 代表者略歴

1987 年 4 月～2001 年 8 月学校法人同朋学園事務職員。1995 年阪神・淡路大震災で同朋大学生らのコーディネーターとして被災者支援にあたった。1996 年～阪神・淡路大震災で全国から駆けつけたメンバーと会合を重ね、1999 年 12 月「KOBE の検証」「今後の緊急時の積極的な行動」などを活動の柱とする「震災がつなぐ全国ネットワーク」設立、事務局長就任。2005 年より代表。2002 年 3 月レスキューストックヤード設立、常務理事兼事務局長を経て現在は代表理事を務める。

代表者の略歴を時系列で入力(学歴は不要)、255 文字以内

35 所管官庁

36 所管官庁が「その他」の場合記入

37 所管官庁局課名

所管官庁については、一般社団法人、一般財団法人、任意団体の場合、入力不要

38 前年度決算総額 9,705,366

39 前年度事業費総額

9,705,366

団体の支出総額を入力

決算総額のうち、事業費の総額

40 役職員数

13

41 業務(活動)日数

20

常勤の役職員数の合計を入力

月当たりの団体活動日数

42 受益者数

43 加盟団体

44 会員数・単位

正会員(団体)23/(個人)11/個人賛助会員
4/自由選択会員 3

45 会費

正・団体 10,000/個人 5,000/個人賛助 5,000/自由選択会員 任意

利用会員・賛助会員など種類別に個人・団体をわけて入力

46 団体の備考

団体名称や法人格の変更、団体の合併などがあった場合には入力(700 文字以内)

担当者情報

申請内容の問い合わせができる方

47 勤務先名

48 部署・役職

郵送先が勤務先の場合のみ入力、自宅の場合は入力不要

49 担当者氏名 加藤 祐子

50 氏名ふりがな かとう ゆうこ

51 郵便番号 461-0001

52 都道府県 愛知県

53 郡市区町村 名古屋市東区泉 1-13-34

54 郡市区町村ふりがな なごやしひがしくいずみ

55 詳細住所 名建協 2F

56 詳細住所ふりがな めいけんきょう 2F

57 電話番号1 052-253-7550

58 連絡先区分 勤務先

61 連絡可能曜日 月～金

62 備考

電話がつながりやすい順に「電話番号1」及び「電話番号2」を入力

63 電話番号2 090-5000-8386

64 連絡先区分 その他

記入例 09:00(半角数記号) 24 時の場合、23:59 と入力してください。

67 連絡可能曜日 月～日

68 備考

69 FAX番号 052-253-7552

70 連絡先区分 勤務先

73 連絡可能曜日 月～日

74 備考

75 メールアドレス

事業情報

76 事業名 真の被災者支援の探求と緊急時の積極的な対応

事業の実態を端的に表してください

77 支援の柱 その他、教育・文化などに関する事業

78 継続ID

ご申請の事業に最も当てはまるものを選択

日本財団から助成を受けた事業を継続申請する場合は入力

79 目的

東日本大震災を受け、2011 年度は震つな加盟各団体が被災地支援活動を展開した。日本財団 ROAD プロジェクトの共同事務局を設置し、足湯ボランティアの派遣、仮設支援連絡会の開催を行った。2012 年度も仮設支援を中心とした被災地支援活動を行うとともに、水害等の災害支援も行う。

2011 年度同様「減災サイクル」を企図した移動寺子屋を全国の主要箇所で開催する。2030 年までに高い確率で発生が予想されるスーパー広域災害(東海・東南海・南海地震)後のボランティアの支援活動の展開を視野に入れ、震つなネットワークを超えた他団体との連携手法について、ROAD プロジェクトにともに参画した「東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会」の活動とも連動した「拡大寺子屋」を太平洋側地域(例:高知県)で実施する。

350 文字以内で入力

80 目標

- ・「応急対応期」…もう一人の命・暮らしをどう守るか
- ・「復旧・復興期」…最後の一人の命・暮らしをどう守るか

2. 平常時

- ・「被害抑止」…もう一つの社会をどう守るか
- ・「被害軽減」…たった一人の命・暮らしをどう守るか

要援護者支援の活動

700 文字以内で入力

81 事業内容

□総会・定例会／5 月および 11 月

□移動寺子屋の開催

開催時期:2012 年 5 月～2013 年 3 月

内容:全国 3 箇所で、過去に災害に遭った地域でのその後の取り組みや災害前の先進的な取り組みを地域のキーパーソンや住民を巻き込んだ勉強会を行う。

場所:未定

□拡大寺子屋の開催

開催時期:2012 年 11 月

内容:東海・東南海・南海地震による甚大な被害が予想される地域で、民間支援団体の連携手法について検討する実践的なワークショップ、または訓練等を実施する。

700 文字以内で入力 必ずインターネット申請用マニュアルの記入例をご参照下さい。

82 事業成果物 **事業報告書**

255 文字以内で入力 この事業を通して作成される報告書・チラシ等を記入

85 助成金申請額 3,000,000

86 自己負担額 664,340

87 事業費総額(自動計算) 3,664,340

助成金申請額、自己負担額(税込)は別に作成する収支予算と同じになるように記入